

松山健城さん (稲生)

趣味の手作りの人形を、子供やお年寄りに贈っています。今では依頼されて作ることもしばしば。



昔、事故で車イスの生活に。それをきっかけに、今の自分のできることをと、編み物や人形作りを始めました。

ともありますよ、羨したときに喜んでくれるのがうれしくて作っているんです。手間がかかるのでたくさんは作れませんが、少しずつ作り続けたいと思っています。



中沢達見さん (里改田)

サッカーの楽しさが忘れられず60歳を前に再びグラウンドに。67歳になった今でも元気にプレーしています。

練習日は決まっています。サッカークラブをやっていくなにより、健康にも良いし、仲間と集まって飲むのも楽しいです。足が動くうちは続けたいと思います。

部落差別は、明治以後なぜ

残されてきたのでしよう⑫

全国水平社創立大会

一九二二(大正十一)年の三月三日早朝から、全国各地の被差別部落の代表者、約三千人がぞくぞくと京都の岡崎公園内公会堂に集まりました。公会堂の入口には「三百万人の絶対解放・部落民の大同団結」などと大書され、堂内にも「解放・団結」のスローガンや旗がひるがえるなかで、創立大会が開かれました。

同和教育シリーズ

と載せています。また、この感激を創立者の一人は、

平二 創刊号は、駒井氏の一句は一句より強く、一語は一語より感激し来り、三千の会衆皆な声をのみ面を併せ、歡歌(すすりなき)の声四方に起る、氏は読了つてなお降壇を忘れ、沈痛の氣堂に齒ち、悲仕の感、人に迫る、やがて天地も震動せんばかりの大拍手と歡呼となつた。

ある歴史家は「この日、この会場で人びとがうけた感激ほど純真で崇高な、また深刻なもの、どれだけの人がその生涯に、一度でも味わうことが出来るであろうか」と語っています。

大会では、まず、全国水平社の綱領が採択され、ついで、日本の人権史上、比類がないといわれる水平社宣言が朗読されました。

「一瞬の沈黙が支配しました。やがて人びとはあい抱き、声をあげて泣きました。理上の役員たちも控室にかけこむなり、相擁して泣いたのです。沈痛・悲仕の感が万人の胸に迫りつつも、なおそれは、はたしない歡喜を底に秘めていたといつていいでしょう。やがて満場は絶だちとなり、怒涛のごとき拍手がうすまきました」と語っています。

続いて各地の代表が決意表明を行いました。奈良県から出席した十四歳の山田孝野次郎少年は、よくとおる声で、自分の差別された苦しさを語りました。

話しているあいだに、彼の胸は悲しみでいっぱいになり、ほほを涙がとめどなく流れ、話し続けることができなくなりました。会場の大人たちも胸をつまらせ、おえつしました。

山田少年は、しばらくは泣いていましたが、思いなおしたように、きつと顔をあげ、会場の大人たちに向かって、「皆さん、いま私どもは泣いている時ではありません。大人も子どもも、いっせいにたってください。光り輝く美しい世の中にしてください」と訴えました。

会場は、われんばかりの熱気が拍手でつつまれました。